

橘川智昭氏の発表論文に対するコメント

崔鍾男* (韓国 中央僧伽大学校)

本論文は、中国大乘唯識において展開した理仏性と行仏性について、関連文献および論師たちを中心として思想的な究明と展開過程などを分析・研究したものである。本論文は、中国の唯識思想の展開と一乗および五性各別思想研究に重要な資料を提供するものと考えられる。

橘川智昭先生（以下、論者）は、これまで円測の唯識哲学に関して多くの研究をなされた方であり、円測思想研究に新たな地平を開拓された。私は、本論文にコメントすることになったことを大いなる因縁と考えつつ、本論文の扱うテーマをよりいっそう深めるために、いくつかの質問と提言を行おうと思う。

1. 論者は、本論文において6つの章に分けて叙述している。読者の理解、および論文の展開と体系的な叙述のために、各章に主題を付けるのが望ましいと考える。

2. 論者は、第2章、第3章において、理仏性・行仏性に言及しながら、「一切皆成仏」と「少分一切」とについて説明している（『成唯識論掌中樞要』、大正蔵 43, 611a12-13: 涅槃捨理性及行性中少分一切唯説有一）。本論文の読者の理解を助けるために、理仏性・行仏性、五性各別思想、『涅槃経』『法華経』などに関連させる形で、「一切」についての具体的な説明があったらと思う。

3. 基は、『成唯識論掌中樞要』において、一闍提 (icchantika) を、生死を楽しむ一闍底迦、涅槃を楽しまない阿闍底迦 (acchantika)、そして畢竟無涅槃性である阿顛底迦 (ātyantika) の三つに分けて説明している（大正蔵 43, 610c23-611a11）。これについて「少分一切」と関連させつつ、説明をお願いしたい。

*최종남 (チェ・ジョンナム)。中央僧伽大学校訳経学科教授。

4. 論者は、第3章、第4章のaにおいて、理仏性を「本有」、「真如」、「仏性」、「成就された〔如来の〕自性」などと呼んで、そのそれぞれについて説明している。本論文に、これについての具体的な説明があったらと思う。

5. 本論文の叙述の順序に関して、理仏性・行仏性の成立の背景・過程などを論述した第3章の内容を第2章に移し、第3章で理仏性・行仏性を主張する見解（=慈恩宗）と、他の見解（=西明学派）などについて具体的に対照・分析して頂けたらと思う。

6. 論者は本論文において「唯識宗」という表現を用いている。論者は「唯識宗」を、中国大乘唯識の全体を意味するものとして用いている。しかし、撰述者の見解が互いに異なるわけであるから、内容に従って地論宗、摂論宗、法相宗（=慈恩宗）、あるいは西明学派などと表記しつつ議論を展開させて行くべきだと考える。

7. 論者は、第5章において、「こうした理のうけとめ方について、いったん中国の固有思想の枠組みからも検討すべき余地が残されよう」と述べている。理仏性思想が中国の固有思想の枠組みから展開したものであると論じているわけであるが、これについて中国の思想と関連させながら説明して頂きたい。

8. 論者は本論文で、様々な文献と論師たちの見解を挙げつつ、理仏性と行仏性について整理分析しているが、個人的には、理仏性と行仏性について、いかなる見解をお持ちなのか、お聞かせ願いたい。

（翻訳担当：佐藤厚）